



序 章



序章 大学の新たな創造に向けて

20世紀も4分の3世紀を過ぎた頃から始まった世界的規模での大きな転換期の到来は国境を越えて、それぞれの国々の社会の深部をも揺るがすほどのうねりとなった。21世紀を迎えて、変化の時代の様相の一層深まる中、あるべき道の模索は世界の各所で困難を極めながら続けられている。日本社会の明日を担う若い学徒の育成を職務とする大学という高等教育の場もそうした困難をのがれることはできない。平成10年6月、大学審議会は、時の文部大臣の諮問、「21世紀の大学像と今後の改革方策について」に応え、諮問に関する中間報告を行ったが、中で、わが国高等教育をとりつつむ21世紀の社会状況を展望し、次のような指摘を行っている。

これからの社会をどのように展望するかは、様々な変化や要素を考える必要があり、一概に言い表すことは難しいが、①一層変化が激しく複雑化した不透明な時代、②地球規模での競争と協調・共生が求められる時代を迎える中で、③少子高齢化が進行し、生産年齢人口が大幅に減少すると同時に、産業構造や雇用形態に大きな変化が起こり、④職業人の再学習をはじめ、国民の間に生涯学習ニーズが増大する、他方、⑤学術研究についても進歩の速度が加速されると同時に学際化・総合化の必要性が生ずるなど、高等教育を取り巻く状況が大きく転換していくものと考えられる。また、産業や雇用の空洞化、少子高齢化による経済の潜在的な成長力の低下、高齢化に伴う社会保障給付の増大などにより、当面は、引き続き厳しい財政状況が続くことが予想される。

21世紀の門前に立った折の大学審議会の時代認識、社会状況を展望した文字であるが、21世紀に踏み込んだ日本社会の推移は、こうした展望の指摘するところともからみつつ一層不安な不安定な場所に踏み込みつつあるように見える。日本の高等教育をとりつつむ社会状況が複雑にして不透明、様々な変動の中にあるとするならば、その変動に正面から対処し、不透明さを克服する確かな道を見いだすためには、私どもが責務を背負う高等教育の個々の現場が、今、どのような状況にあるかの現実の直視の上の一つ一つの問題点を具体的に地道に検証する作業が不可避の危機乗り切りの方策として要請されることになる。

本報告書はそうした問題意識の上に、何よりも本学の明日の創造を目指して、具体的に実践的に本学の明日の歩みに現実に役立つように大学の総力を挙げて行われる自己点検作業である。この基礎的な作業の上に検出される問題点を、どのように解決していくかは、点検作業の終結した後の本学の日常的な歩みの中で不断に問われる課題である。本学にとってはじめての本格的な、総合的な自己評価が当初の目的のどこまで達成し得たかは、本報告書の終結時点でおのずから定まるであろう。事、十分に成らざる場合、その非力は今回の作業を顧みての内省によって、また大学基準協会の外部評価のご指摘はじめ、本報告書を通覧いただいた内外識者のご助言、ご叱正によって一層の向上を図っていくこととなるであろう。まずは、その一歩を歩み出すことから始めよう。